



オリカルクムの記憶

最終章 思い出の予感

峯村
明

オリカルクムの記憶 9

登場人物

思い出の予感

076.

077.

078.

079.

080.

081.

082.

083.

084.

085.

086.

087.

088.

089.

あとがき

奥付

登場人物

竜門渕 めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者 15歳
竜門渕 遠野	竜門渕家の現在の当主 めるのの曾祖母
河合 保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ 14歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A. V. ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ / 源三	竜門渕家の使用人
星名 千助	アマチュアの鉱物学者
F・ヴァリス	フィンランド人の医者

思い出の予感

076.

初めてではないのだ、ラウレンス氏は言った。「この妙な感じは、初めてじゃあないんです。前にもあった。その時は……気のせいだろうと……」

「妙な感じというと？ その……知っている、という感覚？」

「そう、それです。既視感です。四ヶ月前、初めてワダ峠のてっぺんに立った時でした。私はここへ来たことがあると、強烈に感じたんです。東から来て、西へ行こうとしてひと息ついたのだったというはっきりした記憶があるのです、その時の空気の匂い、風の肌触り、そこへ来た目的まで、まざまざと思い出した——」

「目的？」フレディ・ヴァリスは口を挟まずにいられなかったがラウレンス氏は何も聞かなかったように続けた。

「いやいや、そんなことがあるわけがない！ 日本へ来たのはもちろん、中山道の旅など生まれて初めてなんだから。自分では覚えていないだけの、子どもの時のハイキングの経験を思い出しているだけかもしれない。自分にそう言い聞かせ、気のせいなんだと思い込もうとした。中山道を通るたび、ワダ峠で立ち止まらないようにした。あの風の渡る峠の頂上で、耳元で風が鳴るたびに——誰もいないのに、ひとの音がする——正直——怖かった——私はどうかしてしまったのか、知と理と情熱の上に築いてきた私の人生が——」

「イモリ沢で、また何か思い出したんだな」

「……………」

「さっき、ワダ峠の頂上へ来た目的を思い出したと言ったね。それは、なんだったんだろう？」

ラウレンス氏が呼吸を整え、口を開く決心をしたとき。澄んだ高い音が夕暮れの空を渡った。

カナカナカナ……カナカナカナ……カナカナ……カナカナカナカナ……

フレディ・ヴァリスはおどろいて立ちすくんでしまった。「な、なんだい、この美しい音は！」

「セミが鳴いてるんですよ。ひぐらしというセミがね」ラウレンス氏の頬に笑みが浮かんだ。ひぐらしの鳴き声にしばらく耳を傾けてから彼は言った。

「まったく、この国は昆虫の鳴き声さえ、なんといいですか、雰囲気がある！ それも、日ごとに、季節が進むごとに、違う虫が鳴き、趣きが違うんです！ 昨夜はコオロギが鳴いていました。もうすぐマツムシが鳴くそうです！ ああ、ここで一生を過ごしたいくらいです！！ でも——！！」

この地に惹かれるのと同じくらい、怖いのだと、彼は口の中でつぶやいた。

077.

遠野が水先案内人として源三をつけてやって、ラウレンス氏はキリガミネに“嵌って”しまった。

だが、源三は早々に音をあげた。源三にだって仕事や雑用もあればもう、いい年でもある。夏の真っ盛り、朝から晩まで、連日のキリガミネ行きはさすがに体にこたえて、なにとぞ勘弁してくださいと遠野に泣きつこうとしたところへ、救世主があらわれた。

フレデリック・ヴァリス。北欧、フィンランドの出身。金髪碧眼長身、通りすがりの老若男女が思わず振り返る、すばらしい美青年である。

医者だと言われなければサギ師をうたがったかもしれない、保ノ助はこっそりそう思った。それほど彼は慣れないはずの日本語を巧みになめらかに操り、人の気を逸らさず、涼やかな眼差しで注意を惹きつけるのだった。

そして、彼こそ、水つ早町みやげの石をラウレンス氏に渡した“張本人”だった。日本の石を見て、迷わず旅立ってしまった友、アルベルト・ラウレンス氏は予定の二ヶ月をすぎても帰らず、四ヶ月になろうとしていた。もしや、病気になっているのではなからうかと医者らしい心配もちよびりしたが、実は、帰国を催促されたのである。ラウレンス氏の婚約者から。

それは、テア・ヴァリスという女性で、フレデリックの姉だった。

ラウレンス氏は独身のうちに念願の日本旅行に旅立った。約束では現地滞在二ヶ月(旅程別)で帰国することになっていた。船旅でもあるし、予定を大幅にオーバーして、心配するなという方が無理である。帰国次第、結婚式をあげることにもなっていたのだから。

フレディは姉から有形無形の圧力を受け、ついに姉が自ら日本へ行って連れ戻してくると言いだし、とうとう弟の方は休暇をとって日本行の船に乗った。

しかし、来日してみれば……なんという居心地のいい土地だろう！ 山と湖！ 湖面を渡る夏の風！ 七夕、お盆、エキゾチックな風俗！ ミイラ取りがミイラになりそうな予感に、フレディ・ヴァリスは慄いた。

078.

外国人二人組はひぐらしの鳴き声に耳を傾けながら言葉少なに宿に帰ってきた。今日はキツネと出くわして腰をぬかしたとか、草葉に隠れていた水場にはまっておぼれかけたとか、ラウレンス氏のキリガミネ探訪の武勇伝を、保ノ助はいつも楽しみにしていたが、今日はいつもと様子が違うと感じた。なんといってもラウレンス氏の口数が少ないのだ。

「ねえ、ドク」とフレディ・ヴァリスの袖を引く。「ラウレンス先生、ちょっと変じゃね？ どうかしたんすか？」

フレディは軽く頭を振って「キリガミネはすばらしいところだけど、けっこう起伏があるだろ。あんなところを毎日登ったり下りたりしてたというから、きっと疲れが出てきたんだよ。なに、ひとばん眠れば元に戻るさ」と保ノ助を安心させた。

*

明くる朝早く。

「てえへんだてえへんだてえへんだてえへんだてえへんだー！！」しじみ漁に行っていた保ノ助がけたたましく駆けこんできた。

「静かにしろいばかたれ！ 岡っ引きかてめえは！ お客様はまだ寝てらっしゃるんだぞ！！」

「おう、おやじ！ そのお客を起こしておくんな！ てえへんだ、てえへんなんだ！」

保ノ助は血相を変えてジタバタと足踏みし、一枚の紙切れを振りまわしてわめいた。

「おはようございます、みなさん。さわやかな朝ですね」

保ノ助が(もしかしておいらへのイヤミだろうか)と、いっしゅん勘繰ったくらいさわやかにフレディ・ヴァリスが現れた。金髪が後光のようにきらめいている。

「ドク！ てえへんだ！ ラウレンス先生は起きてるかい！？ キトクだって！！」

「なに！？ キトク！？ 竜門渕のばあさまがか！？」

「違うおやじ！ ざんねんだけどそうじゃねえ！ 今朝早く知らせが来たんだって！ 星名のおっさんが危篤だっていうんだ！！」

保ノ助が持ってきた紙切れはアシダ村の野村氏から竜門渕へ送られてきた電報だった。

源三がぜえぜえと息を切らしながら「かわいや」の帳場に現れた。保ノ助の舟に同乗してきたのだった。

079.

「キトク——ホシナさん——行かなければ——」

ラウレンス氏は呆然と繰り返した。やっぱりいつもの調子のいい先生じゃねえやと保ノ助は思った。

「先生、具合がわるいんだろ？ そんなんでワダ峠越えるなんて無茶だぜ。なあ、ドク」

保ノ助はフレディ・ヴァリスに対して意識して馴れ馴れしく呼びかけた。

ラウレンス氏は謙虚で上品で、知的な刺激をくれる。憧れというか、敬意しか持てないが、ヴァリスには(負けるものか)という炎が心のどこかで燃えるのだ。

「そうだと、保ノ助のいう通りだ、アルベルト。その体調で峠越えなど無茶もいいところだ。キミの身になにかあったらボクは姉に顔向けが……いや、そんなことはどうでもいい、どうしてもそのホシナさんに会いに行かなければならないというなら、ボクが行こう。保ノ助、道案内をしてくれるかな」

「おうともさ。お安いご用だぜ。な、先生、そうしなよ」

源三は手をもんで話の成り行きを見守っている。電報を受けた竜門渕から誰か出向こうにも、遠野は高齢、めるのは病み上がり、それこそ峠越えなどできる状態ではない。では、源三が、ということになりかけていたところへ、保ノ助がシジミを担いできたというわけだった。

ラウレンス氏は布団の上に体を起こし、熱いコーヒーを喫した。友がヨーロッパから持ってきたコーヒー豆である。フレディ・ヴァリスはなにしろ、よく気がまわる人間だった。

ふう、と息をつき、ラウレンス氏は笑顔を見せた。

「おいしい。何ヶ月ぶりかな。ああ、目が覚めた。ありがとうフレディ。保ノ助、かわいやさん、源三さん、みなさん、心配かけて、すまない。私は大丈夫です。アシダ村へ行きます。かわいやさん、握り飯を、作っていただけますか」

だよな、と保ノ助は思った。星名千介がいちばん会いたいのはラウレンス氏に決まってる。

ラウレンス氏は自身がアシダ村へ行くことを遠野に伝えてくれと源三に託した。

源三がキリガミネ探訪に音をあげた原因のひとつはラウレンス氏との身長差、ありていにいってコンパスの違いだった。ラウレンス氏はなにしろ脚が長くてそのうえ速い。ある程度ルートがつかめてくるとどんどんと先に行ってしまう、源三はついていけなくなった。あのノリで峠越え……ぞっとしていたところだった。

080.

旅路につくとラウレンス氏はどんどんと先に行く。やはり気が急くのだろう。

フレディ・ヴァリスは悠々と、保ノ助は小走りに後を追うという状態で、フレディは保ノ助にこっそり話しかけた。

「彼、結婚式を控えてることを、おくびにも出さなかったんだって？」

「うん。そんなこと、ぜんぜん、知らなかった」

「実はねえ、ボクはひそかに心配してるんだ。彼、ひょっとして結婚したくないのかな。それでいつまでも帰国を伸ばしているのではないかな」

「うーん……帰りたくないのは、ここが楽しくてしょうがないからじゃねえの？ あ、そういや、こないだ、自分に女の子が生まれたらこういう名前つけるんだなんて、いきなり言いだしてさ。嫁さんもないのに、って、おれ、大笑いしちゃった」

「え。そんなことがあったのか」

「だからさあ、嫁さんもらいたくねえってのは、ないんじゃない？」

「なるほどー」

「ねえねえ、その、先生の嫁さんになる人って、どんな人？ ドクのあねさんなんだろう？」

さぞかし、容姿は申し分ないだろうと保ノ助はちらりと横目を使った。弟の方は男ながらこれだけの美貌。

「ああ、気立てがよくて、心根の優しいひとさ。曲がったことが大嫌いでね、ふだんは優しいけど、怒るとものすごく怖いんだ。ほんとに稲妻が走るような迫力なんだよ。そこがまた魅力的でもあるんだけどね。両親は、テオはきっと前世は女王さまかお姫さまだったにちがいないって、よく言っていた」

「へええ、女王さまかお姫さまかあ」

話しているうちにだんだん不安になってくる保ノ助である。だいじょうぶかなあ、女王さまと結婚したら先生、とって食われちゃうんじゃないかなあ??

先生優しいもんなあ……

「姉は一度……結婚するはずだった」

「え」

「婚約者は、海難事故で、北大西洋で亡くなった。十年ほど前のことだ」

「あ」

「だから彼女は船旅というものに抵抗があるんだ。帰ってこない人を待つのは辛いものさ」

先生の荷物持ちとして幾度か中山道を歩いている保ノ助だったが、今回の旅は速かった。ラウレンス氏はとにかく、先を急いでいた。

081.

星名千介は友人野村氏と、水つ早町から駆けつけたラウレンス氏一行に看取られて亡くなった。立ち会ったのは彼らだけで、千介には家族がいなかったから、葬儀もまことにしめやかなものだった。

臨終はラウレンス氏が電話で竜門淵に伝えた。電話そのものの数が少なく、料金も非情に高い時代のこと、込み入った話も長い話もできなかったが、遠野は電話口でしばし沈黙し、せめて花をおくってやってくれ、と言った。

危篤の知らせが電報だったのは、地方都市では電話交換手が夜間不在だったためである。それでも電報を打ってから半日と経たないうちに文字通り駆けつけてきたラウレンス氏に野村氏は驚き、千介の息のあるうちに間に合ったことをありがたがった。

*

「そんなわけで……野村さんの奥方が、『友人とはいえ、星名さんの位牌を野村が持つのは、違う』とおっしゃって、まあ反対されたわけです。野村さんご本人も困ってしまって。この通り、預かってきました」

遠野は小さくうなずき、「千介の供養くらい、わしんところですよ。いや、本当ならわしが行くべきところじゃった。いろいろ骨を折らせ、面倒なことをさせてしもうたな」

遠野に頭を下げられ、ラウレンス氏は恐縮した。「とんでもない。遠野さん。これもきっと、なにかのご縁でしょう」言ってから彼は妙な気持ちがあった。現実的な科学者である自分にとって、『縁』という言葉はもっとも縁遠いように思われるのだ。

「千介さん、少々借金をしておられまして、それで野村さんの奥方は関わりを恐れたのです」

「そりゃそうじゃろ。なに、借金も葬式代も入院代も、わしが持つ」

「それでしたら心配はご無用です。私がぜんぶきれいにしてきましたから」

これにはさすがの遠野も慌てた。「あんたさんに、そんなことをしてもらう道理がない！」

「千介さんを知って、私はずっと不思議な気持ちでした。ひとことで言えば、幸せだった。あんな人には二度と出会えないでしょう。彼に引き合わせてくれて、ありがとう。遠野さん」

082.

アシダ村の野村氏が困ってしまったのは千介の位牌だけでなく、彼の遺品、数十冊のノートもだった。

千介入院中に彼の家から引き揚げ、野村家の土蔵にこっそりしまって……隠して……おいたのを奥方が見つけてしまい、「あなた。これはいったいなんですか」と問われれば野村家の婿養子は正直に白状するしかない。

「他人の位牌もですけど、奇人の遺品など我が家に置いておけるわけがないじゃございませんの」という意味のことを率直に言われれば返す言葉もない野村氏である。

しかしラウレンス氏にとっては情報の宝庫。むしろ、喜んで引き取ろうと申し出た。彼は水つ早町への帰りぎわに野村家を訪れ、奥方に会い、アシダ村へ最初に来た時に泊めてもらった…その後は旅館をとっていた…こと、千介氏の荷物を預かってもらっていたことに礼をいい、幾ばくかの金額を手渡した。

戸惑う奥方にラウレンス氏は言った。「預かっていただいていたのはたいへん貴重な資料なのです。もしも世に出すことができれば、日本の鉱物学にとって大きな飛躍となることは間違いない、そういう貴重品なのです。あなたのおかげで紛失を避けることができました。心からお礼を」

(先生、口がうまいよなあ)(ほんとに貴重なものなんだろう?)

ひそひそと言いあっていた保ノ助とフレディ・ヴァリスは、大風呂敷にくるんだ荷物をそれぞれ背負わされた。中身はノートである。だいたい、まとまった紙はかなり重い。背負うのが一番である。(これで峠越えろってえの？ たまんねえなあ、かっこわりいなあ)(そんなこと言わずに。貴重なものなんだから)

と、このようにフレディ・ヴァリスは課せられた仕事はたとえかっこわるくても、きっちりこなす。彼の生真面目さ、人品卑しからずさ、見た目の良さ、性格の良さ、頭の良さ、能力の高さは代々受け継がれていく。が、あまりに出来過ぎなこのキャラクターはその出来過ぎゆえに、後世、ある人物のひそかな反感を買うことになるのだが、それはまた別の物語である。

*

そうやって道中、旅人の好奇の目をしのび、苦勞して水つ早町まで運んだノートをひも解いたらウレンス氏は、その解読にのめり込んでいった。これでは帰国どころではないと、誰の目にも映ったわけで、フレディ・ヴァリスはやむなくひとりヨーロッパへ帰ることになった。

「これだけの出番のためにわざわざヨーロッパから来たのに、もう帰っちゃうのかい。ドク」
保ノ助は半ば残念そうに、半ば嬉しそうに言ったものである。

「姉とアルベルトの仲を取り持つためさ。事情がわかれば姉は納得するよ。アルベルトからの手紙を預かったことだし、彼女は話せばわかるひとだからね。保ノ助、元気で。アルベルトをよろしく」

フレディ・ヴァリスにしてみれば話し足りないことがいくつかあって、心残りの事この上なかったのだが、星名千介という人間がラウレンス氏に及ぼした影響には太刀打ちできないとわかった。友はもう、千介が遺したノートに没頭してしまってなにも……テア、フレディ姉弟のことも……目に入っていない様子だった。保ノ助はつぶやいた。「きよくたんなんだよな。先生」「まったく。ああいうのを学者気質というんだよ」

フレディ・ヴァリスの見送りもそこそこに部屋にこもっていたラウレンス氏が絶叫をあげて階段をかけおりて来たのは、その翌日の夕刻だった。

083.

星名千介が住んでいた家は、ぼろぼろのあばら家、家財道具がなければ家畜小屋かとも見まごう代物で、ところかまわず石が置いてあった。

千介氏がその足で歩きまわって収集し、いまだ整理されていない鉱物の標本が山をなしていたのだ。葬儀が終わって、しかし石はさすがに手がつけられず、後日あらためて出直そうということになっていた。

その未整理物のなかに、ラウレンス氏のはるばる持参し、星名氏本人の手に握らせたあの石に似た物がたしかにあった、星名氏が病床でつけていた日記にそんな一文が記されていたのだ。

ほぼ視力を失っていた彼が、おそらく執念で書き留めたのだろうその一文は、まさにミミズののたくりだったが、ラウレンス氏の執念はついに解読に成功した。
『それはオリカルクムである』、と。

084.

オリカルクム——！

伝説の中にしか存在しない、幻の鉱物！ あるいは、金属！！

思いもよらなかった言葉を探り当てたラウレンス氏は、飢えた野獣のような殺気を放ち、千介の家へ走ろうとした。またぞろ、深夜の中山道を、峠を越えると言いだしたものだから、保ノ助はまたもやあの時と同じセリフで引き留めることになった。

「先生、こんな時間に中山道なんて無茶だぜ！！ 今夜は嵐になるって話だしよ！！ そんな興奮して、後先考えねえで山道歩いて、足滑らして谷に落っこちまった、川にはまっちゃまった、な

んてことになったら、フレディのあんちゃんや、テアねえさんに、おいらなんて言やあいんだよ！！」

ラウレンス氏は呼吸を整えながら、大丈夫、大事な用だから、どうしても、ひとりで行く、と異様なくらい静かに言い張った。

「お願えだから！！ 落ち着いて！！ 落ち着いてくれよ！！ ひとりで行くなんて、冗談じゃねえや！！ 星名のおっさんち、おれがついてくからさあ！！ ひとりでいくなんて、やめてくれよ、たのむよ先生！！」

泣いて取りすがる保ノ助を見おろしていたラウレンス氏はふと妙な感慨に襲われた。

先生、先生、と保ノ助が呼ぶ。おれを置いてかねえでくれ。ひとりにしねえでくれ——先生——

「——わかりました。わかりましたよ保ノ助、きみの言う通りにしましょう」

「ほ、ほんとに！？ いや、なんか信用できねえな。夜のうちに、おれが寝てる間に行っちゃうんじゃないか？ よし、こうしよう、今夜は先生の部屋で寝ずの番をさせてもらう。おやじも先生のこと、しっかり見張ってくれ！ いいな！？ たのんだぜ！！」

寝ずの番をするんだとがんばっていた保ノ助は、腕組みをしてあぐらをかいた勇ましいかっこのまま壁にもたれて寝入ってしまった。ラウレンス氏は自分のために敷かれた布団まで保ノ助を引っ張っていき、自分で押し入れから予備の布団を出してひろげ、横たわり、灯りを消した暗闇の中で少年の寝顔を見ていた。

行かねえでくれ、と保ノ助は寝言を言った。置いてかねえでくれ。ひとりにしねえでくれ——先生——

激しい雨音が屋根を叩いている。

085.

一晩中降った雨のおかげで、日が高くなってくるとやたらと蒸し暑い。ラウレンス氏と保ノ助は汗だくになってぬめる山道を踏みしめ、アシダ村へ着いた。アシダ村の故星名千介氏の自宅。しかしどうしたことか、あの家畜小屋のような家が、見当たらない。

たしかにこの辺だったはずだが、記憶違いだろうか。ラウレンス氏は己の記憶力を疑い、その足で役場へ赴き野村氏を訪ねたが、野村係長は県庁へ出張中だった。窓口の応対に現れたのは野村氏よりいくらか若い、男の職員で、彼は「星名さんち？ 撤去したですよ」と言うのだ。

「て、ててててつきよ？ なぜ！？」

「あそこらへん、田んぼ広げて用水路作るようになっててねえ、立ち退いてくれってずーっと頼んでただ。まあ、家主が死んじまったっていうんで、役場の若い衆が行って、かたつけた」

ラウレンス氏は、大量の石があったはずだと食い下がったが、「さあ、こまかいことは……」

「野村係長は撤去のことをご存知ですか」

「さあ。県庁へは財政部長のおともで課長が行くはずだったが、課長急病で、野村さん代わりに行ったんですわ。急だったからばたばたと行っちゃった。ああ、わるいねえ、次の人がつかえてるで」

諦めきれないラウレンス氏はなおもあちこち聞いて回った。係長の自宅を、診療所の野村健吾氏を訪ねたが、星名家にあった石がどこへ運ばれたか、誰も知らなかった。千介のベッドの窓際で日向ぼっこをしていた石は、彼が亡くなった時しっかり握りしめられていたのでそのままになった。千介は墓場まで持って行ってしまったのだ。

ラウレンス氏は無表情に帰途につく。あまりのことに、保ノ助は声もかけられなかった。

086.

風に吹かれながら窓からぼんやりと湖を眺めていると、すぐその船着き場で亭主が舟を出す準備をしているのが目に入った。

「お出かけですか」

「あ、こりゃ先生。ええ、あとで竜門渕のお嬢さんを小島までお乗せするんで。いつものご祈祷でさ」

小島……ふと心が動き、衝動的に、彼は言った。「私もご一緒させてもらっていいですか」

初秋とはいえまだまだ暑い日が続く今日この頃、ずっと部屋に閉じこもっている先生が外へ出たいという。先生とお嬢さまとを以前小島まで乗せたことがあるし、まあ、いいだろう、と亭主は考えた。

「いいですともさ。しばらく時がありますんで、ひとつ風呂浴びたらいかがですか？」

いい考えだ、と先生は思った。レディに会うのに無精ひげはまずかろう。

*

あの嵐のあと、しばらく臥せっていた遠野が「もしかしたらこれが最後になるかもしれん」といつて、「かわいやに舟を出してもらって参拝した。ほんの、しばらく前のことである。

「あれだけ増水したというのに、祠もご本尊もなんともなかった。いや、さすがじゃ」なにがさすがなのか不明だが、遠野が見たときには、異常がなかったのである。

それが、今日、来てみれば――

めるのは、目を疑った。

石の円盤が粉々になっている。

木端微塵の有様で、石の塊ひとつ見当たらない。さらさらとした砂状のものが祠の狭い床に散らばっているだけだ。あとでそれを聴いた保ノ助はつい、思ったことを言った。「久しぶりに遠野さまの顔、みたからじゃね？」

めるののとなりでラウレンス氏がへなへなと座り込んだ。「そんなバカな――」

「めるのさん。ここにあった石の円盤、白っぽくて、灰色で、黄色くなかったですか？」氏の声は虚ろだった。

「そう……言われてみれば……」たしかに、そんな色だった。

「なぜ！！ なぜ今まで気がつかなかったんだ！！ 千介さんに渡したあの石に似ていた！！」

握りこぶしで激しく地面を叩き、ラウレンス氏は泣いていた。「かわいや」の目と鼻の先、小島の祠にそれはずっとあったのに。

彼はそろそろと手を延ばして指先で砂に触れた。「おそらく……たぶん……もしかしたら……そうだったのだ。でも……こんなになってしまっは……もう……」

「ラウレンス先生——」めるのは白っぽくて、灰色で、黄色がかっているように見える砂を見つめて静かに言った。「この光景を見るのは私でなければなりませんでした——」

ラウレンス氏はめるのをふり仰いだ。

「先だつての嵐の時、私は知りました。竜門淵の家は私の代で終わるということ。ここに祀られていた石の円盤と。そのこととは、分かちがたく結びついていたんです。

世間には、祠に祀られているのは神の捨てられた子である、そのような説があるとか。それは当たらずとも遠からじです。

『彼』は竜門淵の祖たる水神が産んだただひとりの男子。けれど、捨てられたものではありません。人の目にそのように見えようと、それは真実ではありません。真実は人が見ることのできない次元に、オリカルクムの円盤の中に閉じ込められました。」

「やはり！ あれはオリカルクム——」

「オリカルクムは神々の金属。神々の意図なくしてこの世に存在しません。意図が果たされ、変質し、やがて崩壊するのです」

ラウレンス氏の鉱物学者の部分には衝撃を受けつつも、めるのの言葉をひとことも聞き逃すまいとしていた。目がギラギラと輝いている。

「オリカルクムの生成には大きな秘密があり、生成者には大きな責任があります」

「え、あの、神々が作るのではないんですか??」

「ごく少数の選ばれた人たち。そして、土の元素霊」

ラウレンス博士はその言葉を頭の中で繰り返した。

「オリカルクムの行く末を見届けるために、土の元素霊は繰り返し、地上を訪れるのですよ」

《…… …… 》

草原を強い風が吹き抜ける。耳元で風が鳴る。いつものことだ。いつもの、ひとの声に似た風の音だと思っていた。が——

誰かがしきりに呼びかけている。そう……呼びかけられているのだ、と、彼は気がつく。

《…… 》

それは彼の名らしい。敬称がつけられている。《……どの 》、と。

《……どの、いや、さんざん呼んだのだがな、やっと気がついてくれたな、ははは。私だ、私。スクナだよ。久しぶりだなあ。

なあ。そなたはこの地に初めて来たと思っ込んでいるが、そんなことはない。かつて、そなたは目的があつてここへやって来た。巨人に会いにきたのだ。ダイダラボッチと呼ばれていた、心優しい巨人だ。

この地にはホシナ族がいた。日当たりのいい広大な斜面でうると菜を栽培し、工房では職人たちが黒曜石を加工していた。言ってみればここは、中央政府の食糧実験場だったのだ。ホシナ族がいなくなってからは、ことごとく失敗して荒れてしまったが。

巨人の話だったな。

そなたが来た時には、彼は連れ去られた後だった。そなたは巨人を追って旅に出た。信じられぬだろうが、この地には巨人を別の遠く離れた地へ移すだけの力が渦巻いていた。

そなたはキリガミネでこんばすが用を成さないのを訝しんでいたな。キリガミネの石は角閃石複輝石安山岩だから噴火したとき既に磁性を帯びていたんだろう、それとも、落雷によって磁化されたんだろう……なぜそんなことを知っているのか？ そなた、そう独り言を言っていたではないか。なに、私はいつも隣にいたのだよ。

こんばすがきかぬのは、そういうこの地特有の性質もあるが、それだけではなかったということさ。

巨人を巡って、私たちは共に旅をした。じつに……困難な旅だった。その果てに、そなたは命を落とした。いや、そうすることを自ら選んだ。窮地から弟子を逃がすためにな。弟子が、やめてくれ、と泣いて止めたのをなんとなく覚えているのではないか？

そなたらの遺骸をひそかにこの地に運んだのはホシナ族だよ。

いくらなんでも、あんな不愉快な場所に置き去りにするのは忍びないといって、彼らは冷たい火の中に飛び込んだのだ。つまりこの地にはそなたらの墓がある。そなたのと、彼、それから彼とおなごがひとり、四人のが、並んでいた。私が水田を開いたあたりに近い。今では湿地の底になってしまった。

……どの。そなたらがこの地に惹かれ、集ったのは、当然といえば当然なのだ。浅からぬ縁があるんだからな。

そなたの家族になろうとしている者たちも縁がある。目に見えぬ理由がな。まあ……正直、少々意外だったが……彼ららしいといえるだろう。自身らの幸福はいちばん後回しにされたのだから。ああ、いや、これは独り言だ、気にせんでくれ。

そなたの妻になるそのひとは、賢明で、慈悲深く、美しい。多くの耐え難きを耐えたひとだ。が、かといって、そなたの学者気質であまり困らせぬようにな——なとなれば——そなたらはあの残酷な世界で果たされなかった夢やら希望やらを実現させる、その礎となろうとしているのだから——

そなたは頭がおかしくなったのでも、気が狂ったのでもない。ただ大事なことを思い出しただけなのだよ。

巡り恵る道は己を全くして長らえり。

(※・あとがき参照)

恐れるものなど、なにもない。恐れずに、心を開きなされ。ほら、私がいつも、そなたの隣にいる。現実はその外にあるのではない。内にあるのだ。そなたは私を知っている。そうだろう？ ダーヴェどの？》

「先生について行くことにした」

保ノ助の宣言は唐突で、さすがのめるのも予想していなかった。彼はラウレンス氏の帰郷に伴って、渡欧するのだという。

「勉強してえ、って気持ちはあるんだ。けど、肝心の俺には上の学校へ行くアタマはねえ、親にはカネがねえときた。先生が学費出してくれるっていうんだが、おやじは頭下げて断った。星名のおっさんが借金とりに追っかけられてたって噂も聞いてたし、ひとさまに借りをつくるのはおっかねえってのは、いくら相手がラウレンス先生だってっても、俺もその通りだと思う。けどよ、おれ、先生について行きてえんだ。先生の荷物を担いで、あとからついて行きてえ。んでもって、ヨーロッパってところをこの目で見てみてえんだよ」

保ノ助は断固としてそう言ってから、腰をかがめて、めるのを見上げた。「おじょうさまは、どう思う？ 吉と出るか凶と出るか？」つまり、占ってくれ、というのだ。

めるのは黙ってまなざしを遠くへ向けた。今は大正14年。西暦で1925年。行く手には世界を分断する大きな戦いが待ち構えていた。この国、その時には立派に大人になっているだろう保ノ助、そしてめるの自身、避けられない道であり、世界情勢の模様などたとえ見えていたにせよ、めるのにはただ、見える、というだけのことで、とても理解できなかった。おそらくなにもかも変わってしまう、それほどの動乱が待ち構えていた。それは火の精霊の嘆きの再来かもしれない。鳥肌が立つのを感じ、めるのはぶるっと身を震わせた。

「あれ、寒いんかい？」保ノ助が自分の絆纏を脱ごうとしたのでめるのは「だいじょうぶです」、と押しとどめた。「ありがとう、保ノ助さんは、やさしい人ですね」めるのは心からそう言った。目の前の保ノ助と、夢の中の保ノ助とに。すると、いつの時も、保ノ助はかならず、照れて「へへっ」と笑うのだ。

「どうか……」

「……へい？」

「何にもとられず、保ノ助さんの心のままに生きて下さいませ。約束してください。かならず元気に帰ってくると。そしてその時には、保ノ助さんの夢の成就のために、私にもお手伝いをさせて下さい……」

めるののことに保ノ助はふと黙った。彼は今まで見せたことのない、真剣な目をしていて。

「そりゃ、逆だ」

「え？」

「それは、あんたの夢だ。おれはあんたの夢をかなえるために見聞を広めに行くのさ」

思いがけない言葉にめるのは驚いて保ノ助を見返した。

「私の夢！？」

「あんたの、失われた学生時代、さ。あの夢を取り戻すために、ここに学校を作るんだ、そうだろ？
メルノさん」

089.

保ノ助は水の上と舟はお手のものだった。はずだが、国際航路の客船は勝手が違った。まず、その巨大さに圧倒され、豪華な内装ときらめくシャンデリアに目を回し、自分とはあきらかに生活水準の異なる乗客たちがひしめく有様に辟易した。まあ、ありていにいって、己の田舎者ぶりを思い知ったわけである。

しかし、保ノ助には強い味方があった。ほぼ半年、ラウレンス氏と寝起きを共にしていたおかげで、ドイツ語、フランス語、英語、その他の言語が入り混じった珍妙なものではあったものの、日常の会話程度ならそこそこなすことができるようになっていた。それで保ノ助は外国人の船員をつかまえては自分の語学力を試した。

つかまった船員たちは最初は迷惑げにしていたが、やがて驚いた。質素な着物を着た田舎者の少年があやしい発音で話す言語がヨーロッパの貴族階級のものだったからだ。それというのも、保ノ助を仕込んだアルベルト・フォン・ラウレンスその人が生粋のベルギー貴族だったからである。ここで保ノ助がそのことを鼻にかけていたとしたら、船員ら労働者からおおいに反感を買っていただろうが、保ノ助自身、ラウレンス氏の出自になどまるで興味がなかったものだから、田舎者かつお調子者な性格丸出しでペラペラと適当なことをしゃべりまくっていたせいで船員たちを面白がらせたのだった。

その様子を見てラウレンス氏は、いくらか、ほっと、肩の荷がおりの思いだった。保ノ助という少年は見たことも聞いたこともない環境のなかで面喰うことはあっても、めげたりしない。へらへらとしながら的確な方向へ進んでいく羅針盤のようなものをもっている。庇護者的存在を必要としないらしいとわかったから。

厳然と人種差別、身分階級が存在するヨーロッパへ東洋人の少年を伴うことは氏にとっても大きな冒険であったのである。保ノ助はいずれ、ラウレンス氏を必要とせずに自分の道を切り開いて行ってしまふかもしれない。若干の寂しさをこめて、氏はそんなふうにあつ早町滞在中に書き始めた紀行文に認(したた)めた。

客船は月のない夜の太平洋を南へと向かっている。昼間、寄港地の上海の大都会に興奮した保ノ助はすっかり疲れてもう寝息をたてている。ペンを置き、波の音と遠く聞こえる機械の音と、一人きりの時間を愛おしむ。彼の手元には小さなガラスの瓶。中には白っぽく、灰色で、黄色がかっているように見える砂が入っている。指先で瓶を傾け、砂が傾くの眺める。

……そういえば……千介さんが亡くなった晩も新月だった……

ラウレンス氏はガラスの瓶を窓辺に置いて寝台に横になる。……夢で逢いましょうか。千介さん……

ほほ笑みながら灯を消して目を閉じると、彼は瞬く間に眠りに落ちていった。

やがて。暗闇に淡い緑色と金色の光が現れ、ゆらゆらと揺れた。砂を入れたガラス瓶のあたり。新月の夜。土の精霊は踊り、その秘密を人に明かすのである。

9・「思い出の予感」

あとがき

イモリ沢、ゲーロッパラ、ジャコッパラなどの地名は実際のものです。グーグルマップや国土地理院地図にはないですが、トレッキング用や遺跡調査時の詳細な地図には載っています。ゲーロッパラ、ジャコッパラは今では別の地名になってるのかもしれませんが。

霧ヶ峰を下るイモリ沢という川が実際あって、『Salamander in～』第一章の冒頭の部分が生まれました。火の精霊はこの川で育ったのです。

以下、あとがきというより、余談として書いておこうと思います。

スクナさまが「私が水田を開いた」と言っている(←フィクションです)のは八島ヶ原湿原。今でこそ湿原地帯ですが、かつては湧水が豊富で稲作には適していただけと言われていました。

その南東にある旧御射山(もとみさやま)神社は諏訪大社下社の奥宮。上社の御射山神社には共同狩猟地・神事の場としての細かな記録が残っていますが、旧御射山には記録がないために、旧御射山も諏訪大社の祭神タケミナカタと関連付けて語られます。

第五章『小島の祠』のあとがきでエビスさま(オオナムチの長男クシヒコ=二代目大物主=大国主)について書きました。このシチュエーション、ホツマツタエでは『カシマタチ』という事件で、記紀では『大国主の国譲り』。タケミナカタはクシヒコと母違いの兄弟です。

諏訪大社はタケミナカタを主祭神として身近に祀っていますし、『国譲り』は弥生時代くらいのできごとではないかと言われていました。が、カシマタチは、25鈴93枝48穂(37穂とも)の年に起こりました。これはですね…

神武天皇即位は紀元前660年でアスズ歴の58年。58年前まではスズ歴でした。スズ歴は天七世の四代目ウイチニの結婚を起点としていて神武の父ウガヤが亡くなるまで続いた。ウガヤ没は51鈴。1鈴=6万年で、スズ歴は300万年続いたわけです。

単純に考えてカシマタチは50鈴の中ごろなので、およそ150万年前です。弥生時代どころか、第四紀更新世のころ…

スズ歴での神々の寿命は、百万年、二百万年という長さで、遡るほど長生きしています。まさに神々ですね。

こうしてみると、この国の歴史は神々の時代ふくめて、実はとんでもなく古くてですね……百万年単位となるちょっと、手に負えないものですから、『Salamander in～』ではぼっさりとして圧縮しまし

た。ホツマツタエを知ってまだ認識も浅い時期に書いたもので、書き直したい部分もありますが、まあ、これはこれで。あくまでフィクションとしてお楽しみください。

No.87 ※:巡り恵る道は己を全くして長らえり

輪廻転生の道は個の人格・霊魂を成長させる、というような意で、スクナヒコナからオホナムチへ、またオホナムチから私(アメノコヤネ)が授かったという教え。

その昔、アマテルの都にて第五代タカミムスビ・トヨケが自分の子(六代目ヤソキネ)と、その1500人の子ら(七代目タカギヤスクナたち)に伝えたという。(ミカサフミ-4アヤ)

さて。

『オリカルクムの記憶』は超古代の『Salamander in〜』と現代とを繋ぐものにして、二つでワンセット…なんだか燃え尽きた感が…

で、この次は——『そなたのと、彼、それから彼とおなごがひとり』の四人のうち、そなたと彼その1は今回出てきたんで、残る彼その2と女子ひとり、ですかね、たぶん。

まがりなりにも、年内に二編を完結させることができました。ダウンロードしてくださったみなさまおひとりおひとりに感謝申し上げたい気持ちでいっぱいです。ほんとうにありがとうございました。では、また。

2024年12月21日 記

奥付

オリカルクムの記憶

9・思い出の予感

2024年12月25日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「素材good」](#)

[「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社